

## オール「ポチ」状態

これは6月3日の、毎日新聞に掲載されていた社説の見出しです。ポチは犬の名前ですが、権力者に媚びる者を揶揄する別称として用いられています。この社説の中で、自民党全体が「ポチ」化した、つまり、高支持率が続く安倍首相には逆らわないゴマスリ集団に成り下がったと嘆いている自民党の幹部の言葉を紹介しています。

そしてこの中で、6月2日付けの「しんぶん赤旗」日曜版に古賀誠・元自民党幹事長のインタビューが出たことも紹介されています。その記事の見出しは「96条改正に大反対」だったそうです。政治家を引退したとはいえ、自民党の幹事長まで務めた人が、野党の機関誌の中で何を述べたのでしょうか？

インタビューで古賀氏は「憲法はわが国の最高法規です。他の法規を扱う基準と違つのは当然」と強調しています。また現行憲法について、「平和主義、主権在民、基本的人権という崇高な精神は尊重しなければならない」「なかでも平和主義は『世界遺産』に匹敵する」と評価しました。そしてインタビューを受けた理由として、次のように述べたそうです。

私の父は、私が2歳の時「赤紙」一枚で招集され、フィリピンのレイテ島で戦死しました。父の訃報が届いた時はまだ5歳でした。私には父の思い出がありません。あの時代、母は自分の幸せなど何一つ求めることなく、私と姉を必死で育ててくれました。子ども心にも母の背中を見ていて、戦争は嫌だ、二度と戦争を起こしてはいけなかつたと思います。この思いが私の政治家としての原点です。戦争を知らない人たちが国民の8割近くを占めるようになりました。だからこそ戦争を知っている、私たち世代の役割は大きいと思っています。

社説によればかつての自民党には、改憲派もいれば護憲派（そういつて悪ければ、戦略的改憲先延ばし派）もいた。上げ潮派（経済成長重視、増税反対）がいれば財政規律派（増税賛成）もいた。ただけでなく、互いに激しく論争した。それが今では改憲先行一色、アベノミクス批判は御法度という単調さであると述べています。そしてこの出来事は、自民党反主流派が、もはや党内には発信の拠点を持ち得ない現実と呼応しているそうです。

最近では野中元官房長官が中国の要人との会談で、尖閣諸島の領有権問題を棚上げする日中間の合意があった、とする見解を伝えた事が波紋を広げています。

野中氏の発言に対して、菅官房長官は「(自民)党を離れた一個人の発言。現職の国会議員でもない」と突き放しています。その上で「中国側との間で棚上げや現状維持で合意した事実はないし、棚上げすべき問題も存在しないというのが政府の立場だ」と全否定しています。

事実はどうなのか。日本側で「棚上げ」合意を認める政府関係者は野中氏だけではありません。更に「日本政府は40年間実効支配し、資源の存在を知りながら、『三つのノー』（自衛隊を駐留させない、島の開発をしない、海底資源を開発しない）を守り、自制してきた。

「棚上げ」への暗黙の了解がなければあり得ないとの意見もあります。

これもまた、オールポチ状態の一例なのではないでしょうか？